



浅川巧の魂に学ぶべき時

本誌の12月4日号で、D氏が「時の権力に直言した官僚、久間健一」なる一文を本欄に寄せている。戦前の農林官僚・久間健一が、日韓併合を機に展開された植民地農政の実態を赤裸々に綴ることによって、「朝鮮農民の自主性を奪う総督府農政に異存をとねえる姿勢を明確に示して」いることと対比させて、現官僚の政権への忖度ぶりを批判している。これに触発されての話でもある▼高橋公純氏は韓国に移住して30年余。この間、ソウルに原爆平和展示館を開設し、韓国人被爆者の霊を弔い、反戦平和を訴え続けている(関心ある向きは11月13日号本欄を参照願いたい)。その高橋氏が12月初旬に来日され、氏の希望で山梨県北杜市高根町にある浅川伯教・巧兄弟資料館にご案内した▼浅川巧は1891年、高根町に生まれた。教員で朝鮮美術研究者の兄・伯教を追って1914年朝鮮に渡り、総督府林業試験場に勤め、朝鮮の「茶色の禿山を緑の山にする」ために尽力した。環境自生という、種子はその土地でこそ発芽しやすい性質を生かした「露天埋蔵法」なる植林方法に辿り着き、これを梃子にチョウセンゴウマツの植林にまい進した。このために種子採取で朝鮮各地を歩き回るかわら、たくさんの陶磁器や家具・民具を収集するとともに『朝鮮陶磁名考』等の著作をものにし、後に民芸運動を展開する柳宗悦に大きな影響を与えた。40歳という若さで夭折したが、「およそ巧さんほど朝鮮人を愛し、朝鮮の風土と自然を好み、朝鮮を理解し、朝鮮民族に親しんだ人はいない」といわれる▼筆者は高橋氏のおかげで浅川巧を知ったが、浅川巧を知る人はあまりに少ない。日韓関係が最悪の状況にある中、百の議論よりも、是非一度高根町の資料館を訪れ、浅川巧の魂に触れてみてほしい。

(土着菌)